

月刊美術 10

No.385 2007

特集

平山郁夫—シルクロード・西から東へ 作家インタビュー(聞き手)本江邦夫

三越美術部の二〇〇〇年
ライオン像が見続けたもうひとつの美術史



田沼武能のアトリエを訪ねて 李 曉剛

今月の作家 鈴木美貴子

第17回東美特別展〈フロアガイド〉

展覧会 浜田泰介／二川和之／蔡國華／赤木曠児郎／高塚省吾／瀧下和之／晃／泉東臣／カヅキ

好評連載 相原麻木「白の道しるべ」

描き下ろし連載 佐々木豊「ヤケ酒と薔薇の日々」

元村平「NOSTALGIA」

Art's Report from N.Y.



山村みどり

カット◎ヨシカワゴエモン

画廊から街頭へ、
草間弥生と小野洋子、
二人の芸術家が支持した
二つの平和運動を紹介した展覧会

イラク戦争の影響下、最近アメリカでは平和をテーマとする展覧会が増えている。しかも市民の不安をコントロールすることで戦争を正当化する強引な共和党支配が、ベトナム戦争やニクソン政権を彷彿させるためか、このところ60年代の平和運動を再考する動きが顕著となっている。

アーティストが画廊を離れて起こした、このような平和運動を考えた時、第二次世界大戦中に多感な思春期を送った草間弥生や小野洋子ら、日本人女性がアメリカで果たした役割が、再評価されてき

たのも最近だ。

この一ヶ月に見た展覧会でも、ホイットニー美術館のサイケデリック美術展「サマー・オブ・ラブ」では、カタログ冒頭に草間とアンディー・ウォールが肩を並べて、最も重要な作家として紹介された(9月16日まで)。また、先月招かれて訪れた、オハイオ州アクロン大学付属美術館では「イマジン・ピース」展と題する小野洋子の平和普及活動を紹介する小展が行われていた(9月7日まで)。

「サマー・オブ・ラブ、サイケデリック時代の芸術」展

幻覚作用のある麻薬で人間の頭脳を科学的に変化させる事を目的としたのがサイケデリック・アート。アメリカでは1966年に麻薬禁止令がでたため、これまで注目される事がなかった。

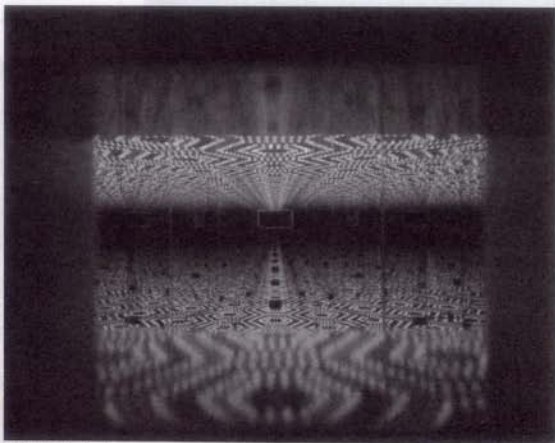
この運動の根底には、医学博士のテイモシー・レアリール戦争世代が、青少年の頭脳を科学的に変化させることで、資本主義の非人道性に対抗する新たな価値観を築き上げようとした政治的目論見が在る。

そのためサイケデリック・アートは、当時20代だった若者達が幻覚作用を使って制作した作品と、そのような麻薬の幻覚作用を拡張する環境を作り出した作品との、大きく二つに分かれる。

60年代後半にヒッピーの女王と唄われた草間の作り出した作品



アルベルト・アロッタ「ピースミール(平和の食事)」1967年 スチール写真
協力:アルベルト・アロッタと映画製作者共同組合



草間弥生「インフィニティ・ミラー・ルーム」1996年
協力:ロバート・ミラー・ギャラリー ©草間弥生

は後者だ。当時の草間を知る人の

話では、草間自身が麻薬に依存することはなく、あくまで政治的な目論見から、プロデューサーに徹していたという。インフィニティ・ミラー・ルーム(写真)や、

デイスコでライト・アートと呼ばれる音楽と光りのスペクタクルを作り出すアーティストらと競演し、参加型の官能的な環境を作り出すことよって、草間は既存の性に関する概念を大きく変化させた。このような性改革は、アメリカのゲイやレズビアンの特権獲得や、人種間の障壁を取り除くことに大きく貢献した。

草間スタジオで当時の記録写真を見ていると、作品には性をテーマとした物以外にも「ニクソン・オージー」や「アメリカ星条旗焼却」など、反国粹主義的な性質の物が多々ある。太平洋戦争下、13歳で日本画家、日比野允夫に師事し、戦時下学徒動員の傍ら、東条独裁政権に抵抗すべく作画したというから、彼女の意識下には一貫した反体制主義が読みとれる。そんな草間の活動が昨年世界文化賞という形で認められたのは感慨深い。来年はヨーロッパで巡回回顧展。2009年には北米巡回回顧展が予定されている。来年2月に

は松本貴子監督が10年間撮り続けたドキュメンタリー映画も封切りされ、素顔の草間が紹介される。

「貴方が望むなら、戦争は終わった」 小野洋子「イマージン・ピース」展

実環境を作り出すことから精神改革を目指したのが草間であれば、人間の想像力を改革の主力に添えたのが小野洋子の平和運動だ。小野の研究者として有名なアクロン大学教授ケビン・コンキャノン博士が企画した「イマージン・ピース、ジョンとヨーコの平和の

その再評価は始まったばかりといった感がある。

日々」展では、そのような小野作品の特色が強く表われ、素晴らしい展覧会だった。

会場には「イマージン・ピース」と題された、世界地図上の政治抗争が起きている地区に、平和への願いを込めてゴム印で「イマージン・ピース」の文字を刻印する作品。また、小野が世界の様々な国に「貴方が望むなら、戦争は終わった」と書かれたビルドボードを設置した記録を、壁一周ぐるりと展

示した部屋。69年にアムステルダムを皮切りとした「平和の為にベッドイン」(写真)などが展示されている。

展示のハイライトはしかし、今年10月9日のレノン67歳の誕生日を目標に現在アイスランドのレイクジャヴィックに制作されている「イマージン・ピース・タワー」と題されたインタラクティブな光りの塔だ。外壁にレノンの歌詞「イマージン」の文字が刻まれたこの塔には世界中から寄せられた平和のメッセージが収納される予定だ。アクロンの展覧会場からも葉書を送る事でプロジェクトに参加出来る。草間と小野、二人の女性の活躍にはこれからも期待が集まる。

(美術史家・MOMA客員解説委員)



小野洋子「イマージン・ピース・タワー」 2007年
作家による構図 ©ヨーコ・オノ



「平和の為にベッドイン」
photo: Ivor Sharp ©ヨーコ・オノ